

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

14. 5. 22

2002年5月号



子どもの病気や事故について、その判断に迷った時の
よきバイブルとしてご活用ください。

子どもをもつ親・保育者・教師に贈る

小児科医からの アドバイス

山田 真 著
(八王子中央診療所所長)

好評
発売中

子どもが次のような症状の時、
保育者としてどう対処されていますか？

- ①子どもが熱を出した時、
登園できる目安は何度か。
- ②発疹が出たら
必ず園を休ませねばならないのか。
- ③「予防注射の当日や風邪をひいた時は、
風呂に入ってはいけない」は本当か。
- ④子どもの事故で
気をつけねばならないことは何か。

など、子どものからだと病気の基礎知識について、
困った時の対処法についてやさしく丁寧に解説します。

●主な内容

- 1章 うつる病気の基礎知識
ウイルスと細菌、免疫、うつる期間、
不顕性感染、再感染
- 2章 発疹の出る感染症
感染症の見分け方、突発性発疹と麻疹、風疹と水痘、手足口病と伝染性紅斑、溶連菌感染症
- 3章 その他の感染症
おたふくかぜ、マイコプラズマ肺炎、夏にはやる病気
- 4章 下痢、嘔吐、便秘
冬にはやる下痢と感染症、小球形ウイルス感染症、その他の下痢、嘔吐、便秘
- 5章 アレルギーによる病気
アレルギーとは、気管支ぜんそく、アトピー性皮膚炎
- 6章 子どもの発熱
発熱について、微熱、ひきつけ
- 7章 病気の症状
子どものせき、はなみずとくしゃみ、川崎病、繰り返し病、成長痛、子どもの問題行動、
リンパ節のはれ
- 8章 質問に答える
おねしょ、下半身の話、子どもの事故、入浴について、予防接種、安静について、食事について、出席停止基準、小児科医の心得



四六判 224ページ 定価：本体1,200円＋税

キンダーブックの
フレール館

幼児の教育

第101巻 第5号



幼児の教育 目次

— 第一〇一卷 第五号 —

© 2002
日本幼稚園協会

巻頭言 パートはパートナーか 大場 幸夫 (4)

ある日 (8)

特集〈動く・動かす〉

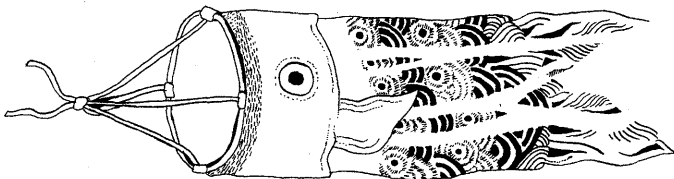
“動く”人間 酒井 朋子 (10)

動くことを支えるもの 新山 裕之 (14)

サイバーワールドを動かす子どもたち 藤代 一成 (18)

空間と関係性をめぐって 矢萩 恭子 (23)

生きもの共存の畝間から(1) 観察から始まる野菜づくり 徳野 雅仁 (30)



変わるものと変わらないもの―過去と現在を浮遊する私―……津守 真…(32)

移行対象と児童文学 I ……………井原 成男…(39)

育てられている時代に育てることを学ぶ(6)

―小学生を学びの主体とした「保育教育」の試み

Ⅱ「教室での赤ちゃんとの出会い」から―…金田 利子・高山 直子…(48)

やきいもやさん おいしいよ……………清宮 聡子…(56)

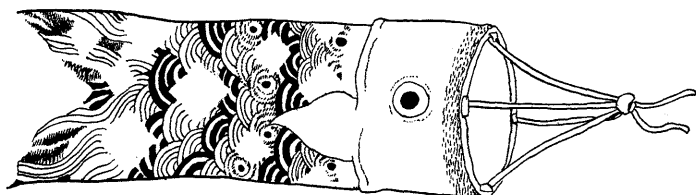
表紙絵／佐々木麻こ

扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／彌永たたえ「大きな口、大きな声」

編集委員／田代 和美・榎田 正子・高橋 陽子

編集部／仲 明子



パートはパートナーか

大場 幸夫

最近気になるのは、実践における協同の問題だ。

その具体的な例の一つが保育現場におけるパートのことである。いまだにパート職員の会議への参加の可能性は低いままだ。制度やシステムの論として、参加できないというような規制の事実があるということも承知の上で、このことが気になる。保育者自身にとつても、それが日常の風景になつて、疑問にさえ思えないほどなのだ。その状況に異議ありとい

う発言は弱い。

考えられる理由として、一つには採用時の契約で、その目的が人手を必要とする雑務への従事に限定されている、と誰もが思い込んでいるふしがある。会議に臨む必要性などは端からほとんど考慮されていない。というより発言権を認めていないというわけではないか。正規の保育者からも、パートの職員をスタッフとしてみなす意識や意味づけも希薄

だ。結果的に「長年そうやってきた」ということでもある。しかし現実のパート担当者の働きは、かなり保育者の優れたサポーター役に徹している例は非常に多い。有能なパートが存在する。しかし、無視されがちなのだ。なぜそうなのか。

まず、一般的にパートという仕事の担い方から受ける印象は、正規の職員の仕事の末端を担う「人手」というふうに捉えられている。そのあたりは、暗黙の了解といえるかもしれない。本務の周辺の作業を請け負ってくれることとして位置付けられることからすると、当然のように、仕事におけるチーム編成の中にスタッフとして位置を占めることがない。

しかし前述のように、担任であるがために動きにくい事態で、パートの身軽さで子どもにかかわって「ワンポイント・リリーフ」役を難なくこなしている実例は多い。朝夕の送迎に忙しく対応する担任保育者の傍らで、介助を求める子がいる。親や保育者からすると、忙しいときに限って、あれこれと注文

の多くなる子ども、という構図は特別のことではない。そのような事態で、普段接することの少ない他クラスの担任よりも、いつもの「馴染みのパートさん」を、子どもは選ぶ。私の任ではないと、すげなく無視するパート担当者はいない。パート担当者が、子どもが接してきても対応しない（できない）するなというようなルールがあるとすれば、子どもに必要な身近な大人の存在に気づかない指導者の姿勢が問われる。パート担当者と正規の担任らとの間の仕切りを外し、それこそ「保育十一時間」への対応に、両者の連携は不可欠の前提条件となることは、論を待たない。

一方、「パート」をしようと職探しをする人の立場から考えることができる。これまでの私の印象では、それは時給や日給による日銭を稼ぐという「生計」を立てる割り切りようで引き受け



ることが、パートということばの意味の根底にあつたと思う。少なくとも自らの暮らしをたてるために働くことが先決であり、仕事を転々とする事自体は覚悟の上という考え方もなりたつ。休職ではなく、育児や家事などの負担から、保育の第一線に去っている保育士は相当な数になるだろう。その方たちの専門的な経験量と実力を活かすことができる。彼女たちからすれば、諦めていた再就職のチャンスでもある。

さらに視野を「経営」に向けるなら、一般に不況の風当たりの強い企業にとつて、人件費の抑制は最大の課題のはずだ。収益をあげるためにできるだけコストの削減を考えない経営者はいない。そこで採用について正規か臨時かをソロバンではじきださねばならなくなる。このことは保育現場も例外ではない。定員割れなどが続くような事態では、園の存続事体が危ぶまれる。やりくりにも限界があり、最終的には廃園の危機に陥りかねない。当然経営者はそうさ

せないために、いろいろと保育に付加価値をつけて勧誘に努めることにもなる。そのことが根本的に保育の質の問題にかかわることを知ってか知らずか。

前述の人手、生計、経営の三点に通底するのは、経済原則に支配されるという現実に則っていることだ。養育や保育という営みが、常に経済原則に則って営まれてきたという事実認識が必要になる。問題はそのような現実に対して、われわれ、つまり保育実践にかかわりを持つものとして問われることは何か、を明らかにすることだ。

私にとつて「パート」は象徴的なことである。一般的に、パート化の最重点の問題は、臨時職員が増えることで労働の質・製品の質の低下が懸念されることになる。専門職の集団が、どれほど時代の要請に応えるだけの質を落とさぬ実践を可能にするか、という問いに対する検討が迫られている。

制度的にパートの占める割合を二割に抑えてきた

というしづりが、規制緩和のうねりにのるように、解けている。保育者集団においてパートの占める割合が増えるという事態に対して、保育者はその前提を踏まえてどのように対応しようとしているのだろうか。はたしてスタッフとしての有機的な連携の必要性を確認できるだろうか。またその上で、連携はどのように生成されるのであろうか。

パートが増えることへの懸念は親から発するだけではない。保育者のなかでは、正規の職員の充当が必要と思われるところをパートでカバーする行政対応への批判がある。もちろん、保育現場で人手がほしくても、経費削減のご時世で、正規職員どころか臨時職員の採用さえ困難な財政事情もあるだろう。その前に、保育実践がほんとうに理解されているとは思えない行政施策もある。「保育十一時間」という問題に対応するために、市区町村の財政が逼迫している現況下では、非常勤職員による時給や日給で対応せざるを得ないという側面も無視できない

事実である。

だがこれらの問題は、一般論先行の議論をしても意味がないと私は思う。なによりも、大義正義をかざして論ずることの前にしておかねばならないことがあるはずだ。それは、本当に子どもの生活と育ちを支える実践になっっているかどうかということだ。そのことを蔑ろにするようなプランの問題点を批判的に検討し、新たな問題解決の方略を明確にすることのできる地道な実践研究が、今こそ求められている。

パートはパートナーだろうか。この問いに、どこから応えていけるだろうか。重い課題であるが、検討を急がれている。子どもによりよい育ちにとつて、どのような保育者の協同が必要か。待ったなしの取り組みになる。

(大妻女子大学)



ある日

撮影・平野 清





特集 〈動く・動かす〉

“動く”人間

酒井 朋子



私は、現在、整形外科の医師をしています。よって、つたない文章で恐縮ではありますが、“動く”という事象に関し、整形外科医として日常のなかで考えさせられることを、すこしお書きしたいと思います。

整形外科とは、御存知の通り、骨、関節、筋肉、靭帯といった運動器を扱う科で、名前に“外

科”という字が入るように、治療として、多く手術が用いられます。しかし整形外科の場合は、手術の技術のみならず、手術後のリハビリテーションというものも治療成績に大きな要素を占めています。その点ではリハビリを現場で実際に指導する人達に頼る部分が大いことも事実です。

このリハビリテーションという言葉は、日常的

に、機能回復訓練といった意味で使われていると思いますが、現在は、人間の機能といっても様々なものに細分化して分類されており、実際のリハビリテーションセンターには、理学療法士、作業療法士、言語療法士といった異なった資格を持つ人達があります。理学療法士とは筋力強化や歩行練習を行ってくれる専門家、作業療法士とは字を書く、箸を使う等の手の細かい機能を回復させる専門家、言語療法士とは言語を発声、発語する練習をしてくれる専門家です。脳梗塞、脳出血などで、複数の障害を負ってしまった患者さんには、その障害の種類によって彼等が協力しあい、総合的にリハビリを行い、機能回復をめざしていきます。

脳梗塞などにより、あるとき失われてしまった機能はなかなか元通りというわけにはいきませんが、リハビリとして繰り返し訓練を行い、それを体に覚えさせることで、実際、かなりの改善がみ

こまれます。失われた細胞が生き返ることはありませんが、訓練により、これらの脳細胞が行っていた役目を、異なった脳細胞がある程度代償できるようになり、それにより機能回復が得られるわけです。人は、あるとき急に怪我をしたり病気をわずらったりして、動けなくなったときには当然絶望にひしがれてしまいますし、その気持ちはその思いをした方でないとはわからないことでしょう。動くことを練習し、動けるようにするリハビリということは当初、そのつらさをさらに助長することもありますが、家族の方々の励ましのみならず、少しずつ動けるようになるという結果が、絶望を癒し、さらなるリハビリの力になっていくようです。現在の福祉の世界では、個々の人間の“quality of life (生活の質)”を考える、ということを最重要項目にあげているようですが、動けるということが人間にとっていかに重要かを示しているように感じます。

我々人間の寿命は近年、飛躍的に伸びており、ことに長寿国日本では、御元氣な八十歳代の活躍には目を見張るものがあります。整形外科が治療しているもののなかに、老人が転倒したときに容易におこる大腿骨頸部骨折と言うものがあります。高齡化のもとのこの骨折の発症率も、十年前の約二倍になっているのだそうです。つまり我々も皆さんもこれらの患者さんと出会う機会が増えているわけですが、この治療における主眼は、なんといつても可能な限り早期に動けるようにしてあげるといふことです。つまり寝たきりのまま様子をみるのではなく、手術的に骨折部をがっちり固定し、早期に痛みを除去してあげることが重要です。我々も高齡であることにややもするとひるんでしまい手術をお勧めすることに躊躇を感じることもあります。一〇〇歳の御老人も手術により再び歩いて御自宅へ帰っていかれました。寝たきりの時期を可能な限り減らし、再度動く事を可

能にして差し上げることが、御本人の元氣を維持することに直結するようです。普段お元氣なお年寄りも、動けなくなると急に食欲がなくなってしまうたり、痰が出しにくくなり肺炎を起こしてしまったりと、徐々に正常な生命活動ができなくなる傾向があり、動くということ、動けるということとは人間に於いても非常に大切なことであるようです。脚の骨折で動き回れなくなることが消化管内の細菌叢のバランスをくずし、これが致命傷になつてしまう競走馬とは比較になりませんが、人間の生命活動においても動けるといふことが元氣のパロメーターなのかもしれません。

整形外科で日常的に扱う病氣のもうひとつに、骨粗鬆症という疾患があります。これは人間を支えてくれる骨の硬さ、強さが加齡変化と共にまたはそれ以上に失われていく状態の呼び名です。人間の一生涯のうち、骨の強さ、硬さを示す「骨量」は青壯年期に最も高く、閉経による女性ホル

モンの減少とともに徐々に減少していきますが、そのピークの骨量は三十歳代までにいかにからだを動かし、いかにからだに負荷をかけるかで決定されるということが知られています。つい数十年前までは生活に電動の道具がなかった時代でありますから、女性や子どもでも険しい山から薪を背負って降りたり、鋤や鍬で田畑を耕したりという過酷な労働を強いられておりました。これらの辛い時代を決して推奨する訳ではありませんが、単に骨量という観点からすると、強い負荷がかかることにより当時の人たちの骨量は、より高い値であったと考えられますし、現代人とは異なる、強い骨、強い肉体を獲得していたことでしょう。

現代人の一人である私はとかく車で移動し、家事はさまざまな機械に行ってもらっております。また最近では、IT革命だ、ブロードバンドだといつて世の中の形態がさらに変化し、自宅でお買物や銀行振込みができる、便利な世の中になって

きました。変わったのは我々大人ばかりでなく、子ども達の生活も同様のようで、外で暗くなるまでドッジボールをするような遊び方から、家の中のテレビゲームやお友達とのメールのやり取りといった形になってきました。現代は、半ズボンで鼻水をたらしているような子どもは見かけなくなりまし、子どもは風の子”といった言葉もすっかりこない時代です。しかし、人間のからだの本質は、すぐに変わるものとは思えず、骨粗鬆症という疾患の出現はこの便利な生活の弊害といえるのかもしれませんが、現代人は精神ばかり疲労することが多くありますが、硬い骨を獲得し維持するためには、普段から努めて体を動かすことと、労役を惜しまず肉体も同時に疲れさせることはとても大切なようです。もちろんそのあと十分な休息が必要なことを触れておかなくてはなりません。

私においては、階段を使わず、すぐエレベーター

ターに乗りたがったり、日曜日はごろごろとほとんど動かず一日を費やしてしまう、自分のなかの“ぐうたら”部分を捨てていきたいものだと思う今日この頃です。日光を浴びて犬の散歩をしたり、万年汚い床のふき掃除ぐらいから初めてみようかとも思います。また、二十一世紀を担うこれ

からの子ども達には、地球上の、動く動物の一員として、できるだけ体を動かして元気な“骨の太い”大人になって欲しいものです。

(日産厚生会玉川病院整形外科)

動くことを支えるもの

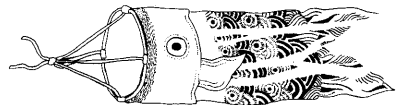
新山 裕之

やってみる

頭で考えることも大事だが、考えたことを自分

の体で実現すること、すなわち実際に行動に移すことはきっとその十倍大事だ。

いくら良いアイデアでも、それは形にしなけれ



ば「絵に描いた餅」。実際に自分が動かなければ、具体的には何も生まれない。うまくいくかどうかは分からない、失敗もあるかも知れないが、それを恐れていては前に進めない。やってみることが大事だ。

毎年楽しみに見ている番組に「ロボット・コンテスト」がある。高校生や高専生などがロボットを使った課題に挑戦する。数人のチームでアイデアを出し合い、それを形にしていける。発想はおもしろいが、実際に作ってみると思うようにいかないことが多い。不具合があちこち見つかり、なぜだろうと頭を寄せ合う。工夫を凝らし、何度もやり直していく姿が頼もしい。まさに試行錯誤の連続だ。

失敗を恐れる子どもたち

そんな番組を見ながら、思い浮かぶのが、最近の子どもたちの失敗を恐れる姿だ。

子どもはおもしろそうと思ったら後先を考えずにやってみるのが本来の姿のように思うのだが……。本当はやってみたいのに「僕はいいよ」と尻込みしたり、できないから、やったことがないからとやらないことが多い。何でもないようなことでも、回りの目を気にする子が増えているような気がする。

そういう子どもたちを見ると、母親が子どもへの行動の先回りする姿が後ろに見える。幸いなことに私の身近には、小さい頃から親の愛情を注がれて育てられている子が多い。ただ、その愛情のかけ方は無意識のうちに、過干渉になったり、過剰な期待になったりすることがある。その期待に応えなければいけないという気持ちが強くと、どこか心や動きに硬さがある子が少なくない。

子を思う故に

子どもが歩き始め、友達を求める頃になると母

親は、我が子（実は母親自身）が他の子ども（母親）とうまく付き合えるかどうかが気になるようだ。例えば、子どもが他の子のおもちゃを取ろうとすると、すぐさま「いけません」とたしなめる。そのうち、取りに行こうとする気配を見た途端にその行動を止めさせようとして先手を打つ。すると、子どもはだんだんと親の枠の中でしか動けなくなる。これでいいのかどうかをいつも母親の判断に委ねるようになる。次第に親の評価を気にするようになるのは自然の成り行きだ。

心をほぐす

そういう子どもは幼稚園に入ると、母から離れどう動いていいか判断できず、動けなくなったりすることもあつた。概して新しい環境に慣れるのに時間がかかる。それが悪いと言うのではない。母親に悪意などない、愛情を注いでいるのだ。むしろ、子どもたちにも罪はない。

そこで、私にできることは、かわいい子どもたちや一生懸命子育てをしようとしている母親の凝りをほぐしてあげることだ。本来もっている子どもらしい積極性を引き出してあげたい。結果だけでなく過程を楽しみむ心の持ちようを知らせてあげたい。

何といつても、それは幼稚園生活だけでなく人生を楽しむコツだから。それができると何をするにも楽になる。楽になると子どもたちの表情は柔らかくなる。いつもそんな表情の子どもたちと接していたい。心からそう思う。

寄り道をしよう・過程を楽しもう

子どもは大人のように器用ではないし、目的をもたずすることも多いから、何をするにもあちこち寄り道し、真つ直ぐには進まない。それでいい。その過程を飛び越して何かができるようになるのはかえって味気ない。その過程で得るもの

方が大事なこともたくさんある。人や物とかかわり合い、ぶつかり合い、思うようにならないこともある。逆に、やってみたらおもしろかった、一緒にできてうれしかったという気持ちも必ず味わえる。

安心して動けるように

心が凝っている子どもたちと接するとき、特に時間をかける。

飾らなくていいんだよ。無理して良い子にならなくてもいいんだよ。ということをいろんな場面で実感させていく。そのために、私も素の自分をさらす。

失敗しない人間はいない。間違えない人間もない。だから、うまくやろうとするよりも、困ったときに困ったと言えるようにすることが大事だ。できないときにはできない、教えて、手伝ってと素直に言える雰囲気や環境を作ってやること

が私の仕事になる。

動くためのエネルギー

人は動くときに、エネルギーが必要だ。それは自分の体の中にある。でも、半分だけ。残りのエネルギーは、回りの人からもらっているように思う。

幸いなことに私はここ数年、周囲の理解に支えられ、応援してもらい楽しく仕事をさせてもらっている。新しいアイデアを提案したときに、きちんと受け止めてもらえている。できるかな？ 動き出せるかな？ と思案しているときに、「それ、いいんじゃない！ やってみようよ」と言ってもらうだけでエネルギーは満タンになり、動き始められることが多い。

失敗を恐れず、挑戦してみよう。結果だけに捕らわれず、過程を楽しもう。

子どもたちに訴え続けてきたことは、実は母親
や私自身に対してのメッセージなのだ。

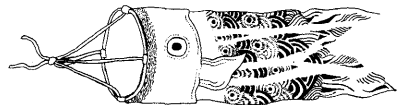
(港区立にしのはし幼稚園)

サイバーワールドを 動かす子どもたち

藤代 一成

グローバル・インフォメーション・インフラ
ストラクチャーいわゆるインターネットや電子メ
ディアを中心とした地球規模の情報通信ネット
ワークの出現で、地球のジオメトリーは容赦なく
歪み、夜という概念がなくなりました。改めて考

えてみると凄いです。隣の実験室でキー
ボードを叩いている学生さんだけでなく、例え
ばアリゾナ州立大学にいる友人の教官とも、体感
的には同じ速度で電子メールを交換することがで
きます。また、先週先方で行った自らの講演のサ



マリーを取めたビデオを彼が公開しているコンピュータに入って楽しむこともできるのです。このようにして、目の前にあって実際触れることのできるリアルな環境の中に、電子メディアを介して伝わるバーチャルな事物が溶け込み始めています。そう、至るところに垣間見ることのできるサイバーワールドは、今の子どもたちにとっては確実に現実化したものとなってきています。

パワーシフトとPax X

私の恩師の一人、國井利泰先生（元東京大学教授、福島県立会津大学初代学長、現法政大学教授）は、一九九八年のA・ルチャーニ氏との著書Cyberworlds (Springer-Verlag) の中で、一九八七年に刊行されたP・ケネディ氏の名著を引用し、パワーシフトの考え方からサイバースペース時代の性格を顕にしました。

ここでいうパワーとは、経済、政治、文化、宗

教といった形で語られる、安定した質と量の物質、エネルギー、あるいは情報をさしているとして、P・ケネディ氏によれば、その「動き方」（パワーシフト）を決定する法則はたった二つしかなく、

- ・パワーの及ぶ領域は情報伝達速度に比例し、
- ・パワーの持続期間は情報伝達速度に反比例するのだそうです。

ローマ支配がもたらした平和な時代（Pax Romana）における情報伝達の主要な手段は、徒歩であったはずで、一時間に10 kmの速さで情報が伝わったとします。また歴史的考証に基づいて、その最大統治面積を $2 \times 10^6 \text{ km}^2$ 、その持続期間をおよそ一〇〇〇年にそれぞれ概数化します。そしてこれらを基準におき、その後の産業革命時代（Pax Britannica）、アメリカの時代（Pax Americana）の主要な情報伝達手段がそれぞれ、蒸気機関、飛行機という発明によって特徴づけら

れると仮定して前記の法則を当てはめてみると、各時代をとてうまく数量化できていることがわかります（表1）。さて、今後歴史的に語られることになるPax Xの情報伝達速度がインターネットによって性格づけられるサイバーワールドの時代であるとしましょう。國井先生は、ケネディの法則によって、なんとその時代が地球の表面積の五〇〇倍を統治できる代わりに、五分しか存続しないという結果をはじき出しています（表1）。例えばビデオゲームのライフサイクルの短さは、間違いなくその傍証のひとつになっていると私は思います。いったい表1が意味することとは何なのでしょう？

サイバースペースの光と陰

インターネットによるコミュニケーションは、個人ベースで地球上すべて等距離に、しかも双方向的に行われます。さらに伝えられる情報の形式はデジタルですから、原始的に品質の劣化がありません。こうした歴史上類を見ない利点を上手に利用すれば、来るサイバーワールドは間違

表1 パワーシフトの法則からみた時代の特徴づけ

時代	情報伝達手段	情報伝達速度	最大統治面積	存続期間
ローマ時代	徒歩	10km /時	$2 \times 10^6 \text{km}^2$	1000年
産業革命時代	蒸気機関	100km /時	$20 \times 10^6 \text{km}^2$	100年
アメリカ時代	飛行機	1000km /時	地球の40%	10年
Pax X	インターネット	$10^6 \text{km} /時$	地球の500倍	5分

とよぶことにしましょう。他者によって情報は設えられるのではなく、利用者が自らの手を「動かす」感覚によってこそ必要な情報は手にできるのだという考え方を植えつけたということです。

例えば、ディスプレイに映し出される美しいカラーマルチメディア図鑑をただ捲らせるのではなく、かつて汗を流しながら、捕まえたばかりの昆虫を使って夏休みの標本製作を行ったのと同じ感覚で、画面の上であっても分類をさせてみましょう。手のひらに乗るようなPDAとよばれる携帯型コンピュータに無線通信、デジタルカメラやGPSを装着すれば、観察したその場で図鑑の入った教室のコンピュータに照会して、名前や性質も調べられ、そのときの様子を画像に収めて、発見場所の位置や自らのコメントとともに、教室に送っておくことができます。このような仕掛けを「サイバー虫網」とでもよびましょうか。こうして日々更新されていく、世界に一冊しかないデジ

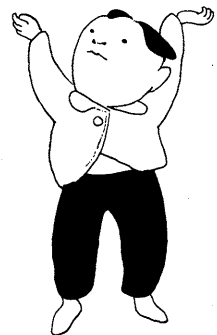
タル図鑑を世界中のお友達にリアルタイムに公開してあげましょう。珍しい種類の写真が電子メールに添付されて送られてきたら、きつと目を輝かせるのではないでしょうか！ このような作業を通じて、子どもたちに自然のすばらしさ、地球の大きさやビューマニズムを実感させるといのは大袈裟でしょうか？

最後に私の研究室の原田あす香さんが修士の研究で開発したFeatherという三次元イラスト作成システムを使った実例（前頁の図1）を紹介します。Featherは芸術科学会 NICOGRAPH2000で優秀論文賞も受賞しました。このシステムを利用すれば、図1(a)のような蝶の標本を、画面に映し出されている三次元のお花畑の中に、羽の曲がり具合を折れ線指定するだけで、観察したとおり次々と飛ばすことができます（図1(b)）。アニメーションも気軽に指定できるようになったら、そのうちふらっと、ペン入力装置の付いた小さな

早く慣れて元氣よく遊び出せるようにと保育者は氣を配る。或いは新しい環境に出会ったときに示す行動やその行動に表れている気持ちは一人ひとり異なるのでそれらに丁寧に向き合っていこうとする。特定のおもちゃを手がかりにして活動が始められる人もいるし、興味を同じくする相手との出会いが活動を始めるきっかけになる人もいる。

また、何とかして「この人と一緒にいれば安心」と思える大人を探して安定しようとする人もいる。もちろん、泣いて母親を求めたり、ぐずったりして不安な気持ちを経一杯表現していくことで、新しい生活への入り口を乗り切ろうとする人もいる。

そんな中に幼稚園という未知なる空間を縦横無尽に動き回って過ごす子どもたちがいる。彼らは、テラスの端から端までを疾走し、姿を消したかと思うと、異年齢のクラスや離れたスペースに入り込んでいく。保育者が居場所を把握しようと



して確認に行ったときには既にその姿はなく、他の保育者や周りの子どもたちに聞いてまわる結果となる。様子を垣間見ると、大変興奮した面持ちで何かに駆り立てられるかのように走り回っている。少しでも興味を引かれるようなものや場面に会おうとそこに入り込み、しかし、一瞬のうちに別のものや状況が眼に飛び込んできてそちらへ向かっている。そして降園時間になってもなかなか自分の保育室へ戻って来ないし、まだ親しみの湧かない大人に促されても抵抗を示すばかりである。保育者とする様子が見えないこの人たちのことがとても気に掛かりながら、そこそこで自分

を求めるたくさんの要求に応えることで精一杯になつてしまふ。彼らにとつて馴染みのない園の間は、刺激に満ち満ちて興奮を呼び覚ますものであるが、次第に気に入つた場所・おもちゃ・絵本・窓からの眺めなどに安定を見つけ、それらが点と点をつなぐ線になつてくる頃には、自分なりの空間把握が出来上がつてきて激しい動きは減り、行動に落ち着きが見られるようになる。やがて、「自分の」保育室という感覚が芽生え、「かえつてきたよ」と言う気持ちが保育者にも伝わってくる。

空間を創り、壊す

ままごとコーナーには棚やテーブルや人形用のベットなどと細々したおもちゃが配置されているが、これらを移動する遊びが盛んになることがある。元の場所から、テラスへ、階段へ、ロフトへ。かなり重い木のテーブルや棚までも運んでい

く。その表情は真剣そのもの。黙々と競い合うかのように行つたり来たりを繰り返す。

或いは、ダンボールの囲いの中や椅子や棚を積み上げた一角に、運んできたものを配置して詰め込むことがある。ままごとのおもちゃばかりでなく、絵本や、セロテープカッター、はさみ、マジック、用意されていた教材などあらゆるものを運び込んでまるで巢作りのよう。物ごつた返した狭い空間の中で、紙を小さく切り刻んだり、マジックで描いたり、思い思いのことをしている。

しかし、いずれの場合も、動かして運ぶところに面白さの中心があるようで、かなりの労力を用いてようやく運び終えたからと言つて、そこで一緒に何かを始める訳ではないことが多い。じきに、運んできたものを投げたり、引っくり返したり引つ張つたりして、その場はめちやくちやになつて終息を迎えることになる。壊れてしまふおもちゃが続出し、保育者がその対応に追われるの

に対し、子どもたちは興奮して大喜びである。壊すというより変化させるといふ感覚なのか、また新たに創り出せるが故のエネルギーなのだろうか。

空間と空間の連なり

自分の保育室から、別の場所へ動くことに大変な精神的葛藤（不安感）を示す子どもがいる。お誕生会の遊戯室、発育測定の保健室、夏のプール、遠足のスクールバス、運動会のグラウンド、お遊戯会のホール……など。

保育者から移動することが告げられ普段と違う雰囲気になると、やっと少しづつ安心して過ごせるようになっていた場所はたちまち、見知らぬ空間への恐怖に満ちて、暗雲が垂れ込める。パニックになって「プールしない」と泣き出したり、「すぐおわる?」「まだなの?」「やるの?」と何回も尋ねたりする。逃げて歩いて一緒に移動しな

い人もいる。拗ねて、柱の陰や裏側の階段に座り込み、動かなくなってしまう人もいる。保育者があれこれ工夫したり、苦心してその場へ連れていくと、意外とケロッとして過ごせたりするから不思議だ。親密な空間が、時間を連ねて存在することがいかに心を安心させてくれるものかと思う。

園に住まう

保育の中の「動く」「動かす」に思いを巡らせるとき、まず、以上のような光景が思い浮かんできた。大体はより年齢の低いクラスでの出来事であるが、子どもによっては年中だったり、年長だったりすることもある。幼稚園という空間（そこには人や物が含み込まれている）で、子どもたちが自分なりにそこに住み込むこと、言い換えれば安心してそこに存在できる自分自身になることは、さまざまな経過を通じて初めて可能となる。

初めのうちは、「自分の」保育室も存在せず、今
 していることから次のことへ移っていく時間的な
 流れも存在せず、保育者がいくら「おへやへ帰ろ
 う」と促しても受け入れられない気持ちをどう表
 現すればよいのか混乱してしまう。また、決めら
 れた場所で決められたようにおもちゃを使うので
 はなく、自分たちの手で自分たち自身の空間を築
 き上げようとする行為が、「引越しごっこ」や「ピ
 クニックごっこ」などの遊びに表れている。時に
 は、みんなと一緒に移動することに大変な抵抗を
 示す子どももいるが、そのような経過を日々の生
 活の中で繰り返し、積み上げることによって少し
 ずつ見慣れない異空間は、親しみを増し、安定し
 て過ごせる場所になっていく。

絆の関係性

幼稚園での生活が一人ひとりにとって楽しく充
 足したものとなるように、担任は、遊びや、身の

回りのことや、友だちとの関わり、生活の流れ、
 など様々なことに細かな配慮を重ねていく。子ど
 もの表現を受け入れ、そこに表れている子どもの
 気持ちを支え、時に、保育者自身の「私」という
 境界との葛藤を抱えながらも互いを理解し合おう
 と志向する。子どもたち一人ひとりとの関係が
 「信頼」という絆で結ばれていくようにと願い、
 努力する。それが時間をかけた長い道のりになる
 こともあるが、その為に迷い、悩み、考えながら
 日々を子どもとともに生きることこそ、保育とい
 う営みであると言えるであろう。担任は、子ども
 を操る技術でもって子どもを「動かし」、園の生
 活へ適応させていく訳ではない。しかし反面、担
 任は、子どもたち自身の気持ちや思いを丁寧に読
 み取り、尊重しながらも常に担任としての見通し
 の上に動いている。それが妥当でないことももち
 ろんあり、だからこそ、担任は日々反省的に自分
 自身の保育を振り返り、新たな見通しを持って、

新たに子どもたちと関わっていかうとする。

「動かす」意識が強くなりすぎてもいけないが、クラスや子どもたちの方向性を現実の子どもたちの姿から創り出していくのは担任の役割の重要な部分であると言えるであろう。

誤解を恐れずに言うならば、クラスを任されている担任には、そういった意味で子どもたちを「動かしている」という実感がある。それは、例えば、おもちゃを片付けてお弁当にするといったありふれた日常の生活の流れであったり、クラスのみんで一緒に散歩に出掛けることであったり、保育室でゲームを楽しむことであったり、行事に向かつてクラス全体の意欲を引き出すことであったりと、数え上げればきりが無い。もちろん、子どもたちの自発的な遊びに対しても、現実の子どもたちの姿から見て、どんな援助が考えられるかを模索し、或いは、その中の「○○ちゃん」についてこういうところに気づいて欲しいと

いう願いをもって関わり、日頃気になつている「△△ちゃん」の弱い面が克服されるようなチャンスを考える。このように担任は全て何らかの理解に基づいた、一定の意図を持った様々な関わりを行う。

通いあう心

ここまで考えてみて改めて保育の中の「動く」「動かす」について振り返ってみると、保育は一見すると、子どもの「動く」と保育者の「動かす」（裏を返せば子どもの「動かされる」）という関係のように読み取れてしまう。しかしながら、子どもたちと保育者とがうまく調和しあっている関係というのは、保育者の一方的な意図に子どもたちが素直に従っているような関係を指すのではない。調和のとれた関係においては、保育者が子



どもたちを動かしたように見えることも、実は子ども自らの気持ちが出たが故に他ならない。

子どもたちの実際の姿をよく見ずに一方的な意図で働きかけても子どもは動かないものだからである。例えば、朝の身支度がなかなか進まない人にその人自身の『今』の状態を無視して保育者の意図ばかりを優先させて関わっても、相手は決して保育者の望むようにはならなかったり、頑なに「お友だちにはおもちゃを貸さない！」と頑張っている人に長々と説明ばかりを押し付けてもその人の心を動かすことにつながらなかったり……といったことを保育者である私は繰り返し経験してきました。また、強圧的な態度をとらなくても、担任は、口調や視線で子どもを操作してしまうこともあるので気をつけなければならない。

同じように声をかけ、注意して気づかせてきたつもりが、なぜ隣のクラスの子どもたちは、忘れずに庭靴をしまえるようになったのか。引出しを

開けっ放しにせずにはさみを出し入れ出来るのか。互いの気持ちを滑らかに言葉で表現できるのか。生き生きとよく関わり合って遊ぶのか。心がこちら側にあつて、一方的に子どもたちを動かそうと焦っている間は、こういう類の迷いはなくならない。

以上のように「動く」「動かす」は単に子どもにとつての空間にまつわる動詞に留まらず、時間軸との交わりにおける保育者と子どもたちとの関係性を示唆している言葉であったことが分かる。保育者として「動かす」を考へるときには、必ず子ども自身の「動く」を視野に入れて関わるようでありたいと思う。

(洗足学園附属幼稚園)

観察から始まる野菜づくり

徳野 雅仁

ソラマメ(空豆)は、五月下旬に収穫期を迎えます。空に向かつて莢が生長するところからその名があり、この莢が下を向くと、収穫期です。五月に穫れるところから五月豆の名もありますが、この花の愛らしさは春の菜園に欠かせない彩になっています。

ソラマメの花は、それぞれの枝の葉脈に一〜四花ずつ、下段から順に着生し、枝ごとに同じ方向を向いて咲きます。花弁の模様に愛嬌があり、あたかも葉腋からいつせいに飛びたつハチドリを思わせませす。

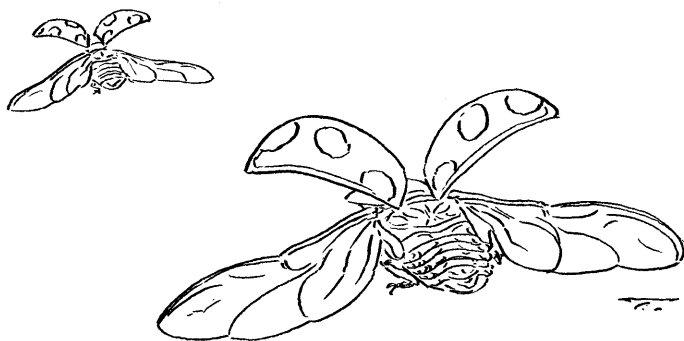
野菜の花はどれも控えめに咲き、見過ごしてしまいがちですが、ナス、ジャガイモ、ネギ、ニラ、ダイコンなど、身近かで観察してみるとあらためてその美しさに気づきます。できればルーペや、カメラのマクロレンズを通して見ると、肉眼では見えなかった世界がクローズアップされ感動も大きくなります。花に限らず芽や茎葉、果実からタネに至るまで、拡大して眺めてみると、自然がつくり出した見事なまでの造形美に感心してしまいます。そして、ついでに雑草も。ホトケノザの小さな蕾や花、ハコベ、オオイヌノフグリ、そして、アカザの小さな花を拡大してみると、これほどにも神秘的な花を咲かせていたのかと新たな感動を覚えます。また、ナホシテントウの幼虫がアブラムシを食べる様子や、昆虫の営みを追ってみると、普段知り得ることができないさまざまな場面に出会い、野菜づく

りを行う上で昆虫や雑草が欠かせないものであることがわかってきます。

たとえば、四月から五月にかけて、ソラマメの芽先にはビッシリとアブラムシがつくことがあります。しかし、すかさずナナホシテントウが飛来して捕食し、幼虫も現れてアブラムシを食べ始めます。おもしろいのは飛来の仕方です。一株に二匹ずつ分散し、幼虫も同じ数で分散します。とくに幼虫は大食漢で食欲旺盛。ほぼ二三日ですべて食べつくします。なぜ一株に数匹が集中せずに見事に分散できるのか、自然界には人間にはわからない不思議な出来事が数多くあり興味がつきません。このように作物と昆虫、そして、雑草と作物、雑草と昆虫の関わりを注意深くみつめると、これまでの知識では知ることができなかった自然界の仕組みが見え始め、昆虫や雑草の存在こそ作物の生長に役立っていることがわかってきます。

野菜づくりは、環境への配慮と、作物が自然で健康に育つように、そして、それを食べる私たちにとって安全を最優先したものでなければと思っっています。野菜づくりを通して菜園に飛来する昆虫や雑草を観察しながら、自然界の素晴らしさやおもしろさを子どもと一緒にわかち合えればと願っています。

(イラストレーター イラストも筆者)





変わるものと変わらないもの

— 過去と現在を浮遊する私 —

津守 真

二〇〇二年一月半ば、私は久しぶりにお茶の水女子大学附属幼稚園を訪問した。

十八年前、この幼稚園で過ごした最後の日に、私の手に優しく触れた子どもの手のぬくもりが、この年月、いつも私の心にあつた（注1）。久しぶりに訪問する緊張感を抱いてこの日を待っていたとき、今度もきつとだれかが私の手に触れて来るような気がしていた。

この日は雨が降りそうだったが、冬にしては暖かい日だった。三歳児の森の組に一歩入ったとき、一人の男児がプラスチックの組み木を長くつなげているのが目に留



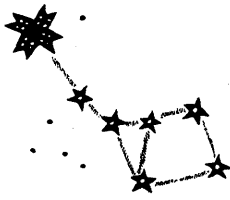
まった。私があるとき決意を新たに、三歳児が五歳になるまでの三年間を保育実習生として同じクラスで過ごそうと思った最初の日の光景と同じだった（注2）。私はその子が同じように自動車を作るのかと錯覚しそうになったが、この日は違っていた。当たり前である。子どもは毎日、毎年違うのだから。クラスの先生も、十八年前はベテランのH先生だったが、この日は若いM先生である。

私は庭に出てみた。隣の川の組の女の子が「おじいさん、どこから来たの?」とたずねた。以前には私は「おじいさん」と呼ばれていた。年月を経ているのだから、これも当たり前である。

砂場で何人かの子ども達が水を流して水路を作っていた。水に手を入れて、砂の塊をいじっていた。その前日、愛育養護学校で、ひとりの体の大きい子どもが、水に手を入れて長い時間をかけて水路を作り、ひとかたまりの砂を手でほぐして硬い石を取り出しているのを見ていたので、子どものイメージには共通のものがあることを私は思った。かたわらに磁石で砂鉄を集めている子がいた。皆から「博士」と呼ばれていた。私は砂場から遊戯室へ、またクラスへとゆっくりと移動したが、今日は私に近寄って手にさわる子どもはいなかった。それよりも、一歩足を運ぶ度に、この幼稚園で過ごした三十年間のさまざまなおのずから私の心に浮かんできた。私はこの場所で、自分がどう生きるかを、長い年月考えて来たのだった。



森の組を出たところにある川（水は流れていない）に渡した橋の傍らで、私がまだ米国に行く前だから昭和二十年代に、三歳の男の子を、自分の正義感から、大きな声を出してその子の肩を揺さぶったことがあった。保育のあとで、担任の堀合先生から、今日のあなたの保育は小さなお子さんにふさわしいものではありませんでしたね、子どもの心はもつと淡いものですとたしなめられた。細かなことは覚えていないが、あのときの強烈な印象を私は忘れることができない。「子どもの中にいるとき、自分の正義感が先に立つことがある。そういうときはよくない」とこの日我が家の前の幼稚園の子どもたちと遊んで帰って来た妻がふと言い出した。私は直ちに同意した。これまでに何度か私は同様な過ちをした。その最初の鮮明な記憶である。大人の正義感をあらわに表現することは教育の上で必要だと言われることがあるが、よく考えれば、それは大人の考え、常識の中での正義感である。そのとき、大人は子どもの側の見方を忘れている。子どもの言い分に耳を傾けることが先であることを、当時二十歳だった私はこの庭の左端の橋の傍らで学んだのだった。私の思いは現代に飛ぶ。一方的な正義感の故に、他者の存在が目に入らなくなるといふ現代の世界の悲劇。子どもたちの間で起こっている状況、その子の感じ方、理解力などの全体をとっさに考へて判断するのが保育であって、理念だけを取り出して善悪をきめるのでは、人間の倫理にならない。



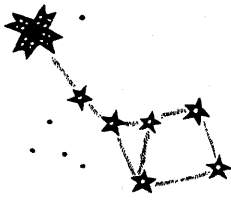
園庭の反対側の橋に行つたとき、私は米国から帰つて直後のことを思い出した。及川ふみ園長が北海道のトラピスト修道院で大きな動物のぬいぐるみを頂いて（こんな大きなぬいぐるみの動物を見たのは初めてだった）子どもがどのように遊ぶかを心理学的に研究してほしいと言われて、私は幼稚園の観察研究をはじめたのだった。カンガルーの赤い舌の先や、ペンギンの黄色い口ばしが子どもにも喜ばれたのを思い出した（注3）。その心理学的研究はさらに進んで、保育室の角に、当時は珍しかった観察室を大工さんに作ってもらつた。及川ふみ先生は直ちに私の提案を実行してくださつた。窓の外側に白い網を内側に黒い網を張ると内部が暗くなり、観察者は向こう側から見られないで保育室を観察できる。この観察室は幼稚園の先生たちからはひどく評判が悪かつた。一方的な観察だから、それは当然である。観察者は子どもや先生からは見られない透明な存在になるべしというのが当時の心理学的観察の第一の心得だった。倉橋惣三先生が児童学科をつくられたとき、子どもに直接ふれる実習が児童科の一年生の必修カリキュラムに入れられた。こんな単純なことを実行するのがいかに困難だったことか。保育に参加して観察することが方法として認められるのには長い年月がかかつた。

門に近い場所にあつた物置小屋を改造して「子供の家」にしたのは昭和三十年代初めだった。これも及川園長の発案だった。いまも子どもたちの遊びに使われていると



の話を書いて私はいれしく思った。当時私はそこでドールプレイの研究を行った。子どもをひとりずつ連れて来て、設定された条件下で観察するという研究である。この種の研究は、研究報告には便利だが、それが毎日の保育にどう寄与するのかを私は示すことができず、これも先生たちの間では評判が悪かった。私はもつともだと思っただ。そんな経験から、私は最もシンプルな方法で、保育の中で起こっていることをそのままに、できるだけ毎日記録を積み重ねることをはじめた。昭和四十年代はじめてある。私一人ではできないから、学生さんたちに協力してもらった。その中にはこの日私を案内してくださった副園長の榊田正子さんもいた（注4）。なまの記録そのものの中に意味があることを知ったのは更に後であるが。

この日、一人の子どもが、「おばけやしきに来てください」と私に紙片を渡してくれた。遊戯室でやっているという。遊戯室に行つて紙片を見せると、まだ開いていないと言う。しばらくして再び行つてみたが、お化けのお面をかぶった子が、数人の子と言ひ合ひをしていた。あとで先生方と話したとき、この子たちは今日はいまうまういかなかったと行つて帰つたとのことだった。遊戯室では他の子どもたちが面白く遊んでいた。それを見ている間に私はこの場所で、何度となく「おもちゃや」「動物園」など誘導保育の最終日を見たことを考えていた。この幼稚園の誘導保育には大正の末からの歴史がある。私が知っていた昭和三十年代、四十年代も、まだ盛んだった。一学



期かけてたとえば「おもちゃや」で、さまざまな時計、写真機、風車……を作りためておく。どれも子どものアイディアを先生と一緒に考えて作るから面白かった。時計ひとつをとっても、腕時計、懐中時計、柱時計、置き時計、飾りやデザイン、形や色がさまざまで、どれひとつ同じものはない。絵本を作るのにも、掌に入るような小さな絵本、マンガ、字の書いたものなどお話もさまざまだった。箱を使ってカメラを作ると中から絵本が出て来たりする。先生も毎日考えていないと、子どものアイディアに追いつかない。日々の遊びの中で作った物を藁のつとに挿して皆が見えるように一学期間ためてあった。私はそのアイディアを我が家に持ち帰って、当時幼児だった私の子どもたちといろいろの物を作った。それはかならず子どもたちに受けた。一学期に一度大売出しが遊戯室で行われるときには、他のクラスも招待された。見物の私にはそれが売れてしまうのが残念でたまらなかった。坂元彦太郎園長が少し引きずる足であちからこちらへと歩き回りながら、いまもそこにおられるような気がした。

そのころ、運動会の練習の時期になると、子どもたちの普段の様子が荒れてきて、おねしょが多くなったり、幼稚園に朝来たがらない子どもがふえることに私共は気が付いた。保育者には気が付かないことが記録者には見えることがある。私共がそのことを話題にすると、担任の堀合先生は直ちに練習なしに本番の運動会に臨むことを断行された。以前には小学校の校庭で幼稚園も合同の運動会だったが、現在は幼稚園の



園庭で幼児に無理のない運動会をしていることを、この日に私は知った。

一九六八年―一九六九年に、フルブライト交換教授として、デール・B・ハリス教授がお茶の水女子大学に来られ、附属幼稚園を見て、米国で失われたものがここにある、自分はノスタルジアを感じると言われた。それから更に三十年以上たたって、米国の幼稚園は管理主義に傾いても、この幼稚園は日本で培われた進歩主義教育の本質を保っているのをこの日に私は見た。日本から世界に発信する幼児教育があることを私は心強く思った。

注1 『幼児の教育』第八十二巻第四号一九八三年 『保育の一日とその周辺』フレーベル館 一

九〇〇年所収

注2 『幼児の教育』第七十五巻第十二号一九七六年 『保育の体験と思索』大日本図書 一九八

〇年所収

注3 『幼児の教育』第五十三巻第十号一九五四年 『幼児の教育原理と研究』（津守、木原編）

フレーベル館 一九六七年所収

注4 磯部景子他、「五歳児の記録」『幼児の教育』第六十四巻第六号一九六五年―第六十七巻第

十号一九六八年 フレーベル館

移行対象と児童文学 I

井原 成男

移行対象というコトバを最初に使いはじめたのは、イギリスの児童分析医であるウイニコットという人で、一九五三年に書いた「移行対象と移行現象」という論文からです。彼はまた、小児科医でもありません。彼は、幼児が肌身離さず持ち歩くもので、それがないと、ひどく不安になる、ブランケット（日本ではむしろタオルケットが多いのですが）そういう毛布だ

とか、ぬいぐるみ、人形などの無生物を移行対象と呼びました。

児童文学の中には、この移行対象がたくさん登場します。ここではその中から最もポピュラーな三つの物をとり上げます。最初は「ジェインの毛布」で、一次的移行対象の好例です。二番目は、おなじみ「くまのプーさん」。これは二次的移行対象の例です。児童

文学の中に登場する頻度が最も多いのも、このぬいぐるみたちです。最後の三番めの物語は「ジェシカ」です。これは空想のお友達との登場する物語です。

「ジェインの毛布」と移行対象

アメリカの劇作家アーサー・ミラーの書いたものに、移行対象への執着とそれからの卒業をテーマにした「ジェインの毛布」という作品があります。これは劇作家として名声を博したミラーが、初めて子どものために書いた物語です。毛布（ブランケット）といえは、アメリカで最も人気のある、おなじみのチャールリー・ブラウンのピーナツブックに登場するライナスも、ブランケットに執着していました。ミラーもまた、初めて子どものために書いた物語に、毛布に執着する子どものことを書いたというのですから、こうい

う行為はアメリカではポピュラーな現象なのでしよう。しかしこの物語は、日本の子どもたちにも大変訴えるところがあるのでしようか、私が図書館で借りた本も、多くの子が借りるということです。大変人気のある物語で、一九八七年版ですでもう四十七刷と書いてある、広範に読まれている本です。大人の作家が子ども向けに書いた作品は、がいて子どもにはそれほど読まれないことが多いのですが、この物語はそうではない、なにかとても子どもの心に響くものがあるようです。

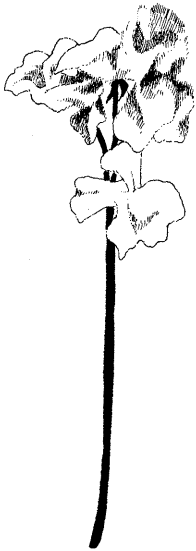
物語の粗筋を見ながらいくつかの特徴をみてみましょう。

主人公ジェインは赤ちゃんの頃から、それがあると安心して遊んだり、眠ったりできるピンクの毛布を持っていきます。（ジェインは自分でそれに「モーモ」という名前をつけています。ウイニコットがいうように、この毛布は自分で選択し、名づけたジェインの創

造物です。それは、「ふんわりして、あたたかい、あかちゃんもうふ」で、人生最初期の、理想的な母親を象徴するものです。彼女はベビー・サークルに入れられると泣きますが、このモーモを渡されるとピタリと泣きやみ、すやすやと寝てしまうのです。モーモは母親との分離の時間を埋めるものとして機能しています。

この本の挿絵をかいたアル・パーカーという人は、アメリカで最も有名なイラストレーターで、子どもの挿絵の仕事を多くしている人のようです。私は偶然この人のある記録映画で見たことがあります。ピートルズのメンバー、ジョン・レノンがオランダのヒルトン・ホテルでオノ・ヨーコとベッド・インをして、たくさんの人と論争し、平和を訴えた映画です。ベトナム戦争が泥沼化し、アメリカ国内を問わず世界中で反戦運動が高揚していた、今から二十年前の出来事です。ジョン・レノンの記録映画「イマージン」を見る

と、論争相手の一人としてのアル・パーカーさんが登場するのです。常識的で、物すごく人のよさそうなおじさんという出で立ちです。結局彼は、「お前さんたちの反戦の主張なんかわからん、それにあんたたちの撮ったヌード写真は、見るに堪えない恥さらしなものだ」とジョン・レノンとオノ・ヨーコを断罪し、ニコニコと去っていきました。アル・パーカーは、ジョン・レノンに、「あなたの欲しいのは世界の平和ではなく、あなた自身の心の平和なのだ」と言いました。ジョン・レノンが、父に捨てられ（彼は私生児でした）、母にも捨てられ、さらに十六歳でこの母とも死に別れた人、そして決して自分を見捨てない母親を誰



よりも求めた人であったことを考えると、案外このアル・パークの指摘は当たっていたような気もします。オノ・ヨーコはジョン・レノンにとって、決して自分を見捨てない母親だったと思うのです。まるで、ジェインが決して自分を見捨てない理想の母親との安らぎを毛布に象徴させたように、ジョン・レノンは理想の母親との安らぎを、オノ・ヨーコとのベッド・インに象徴させたのです。

ジョン・レノンがオノ・ヨーコとの付き合いを経て、ラブ・ソングを歌うビートルズから脱皮していったように、ジェインも毛布から離れ、一人で出来ることが増えていきます。そして一人で出来ることが増えるにつれ、毛布を忘れる期間もでてきますが、なかなか捨てられないのです。面白いのはジェインが目だって大きく成長する時期にかぎって、もう忘れていたはずの、毛布のことが変に思い起こされるといふことです。毛布は彼女の幼い時と、そこからの成長を思い起

こさせる大切なものです。

ジェインは母親から、「あなたはもう赤ちゃんじゃないんでしょ。あれはもうポロポロになって使えませんよ」とさとされても、頑固に大騒ぎして諦めません。そしてポロ布袋から母が取り出してきた毛布、今ではもうジェインを包むことができないうらい小さくなった（というより、本当はジェインの方がすっかり大きくなったのですが）、その毛布の上に寝て、自分が成長したことを確認するのです。そしてジェインは母親に、「モーモがちいさくなったのは、あたしがおおきくなったからよね」と確認するのです。

こういうプロセスは、臨床的に見てとても重要です。例えば、思春期の心性を理解するのにとても重要なのです。思春期の子たちは、私たちに對して独立を主張し突っ張ります。誰の助けもいらないと突っ張るのです。けれどまた思春期の子ほど見かけとは裏腹に、誰かに依存したがつているものもありません。こ

の矛盾そのものが思春期心性の特徴といえます。こうした心性について熟知していると、思春期の子への治療はとてやりやすくなります。私たちが一つの家を離れ、次の家に引越そうとするとき、それまでではなくでもなく当たり前と思っていたものまで急に懐かしくなり、その大切さが急に強く感じられるのと同様に、次の時期への飛躍の時であるからこそ、逆説的に私たちは、過去のものにこだわり、以前のものを自分ほきちんと体験してきたか、そしてそれは欲しくなればいつでもまた手にいれることができるものなのか、あるいはもうそこから卒業していいくらい、それは自分のよき思い出として内面化されているか、そういうことが問われるのです。

過去の毛布にこだわるジェインも、次のステップに向けて、そうした自分の成長にたいする確認のプロセスを通過しているところなのです。このプロセスは決して省略できるものではありません。それは思春期の

嵐（疾風怒濤）が、決して省略されてはならないのと同じことです。

やがてジェインが毛布から卒業する日がやってきます。今ではハンカチほどに小さくなった毛布を、母親に出してもらったジェインは、もうこの毛布を掛けて寝るわけにはいかないのだと悟ります。ちなみに母親は、この毛布がジェインにとっても大事な意味をもつものであると直観的に気づいています。そしていつでもジェインの求めに応じて取り出せるように保管しているのです。これはとてもいい対応だと思えます。その子の大事な物をとっておくことは、その子の大事な心に、居場所を与えていることだからです。

ジェインはポロポロの毛布を窓べに置いておきます。次の日ジェインは、小鳥がその毛布の糸をほぐして一本ずつ、自分の子どもを育てる巣作り用に運び始めている姿を発見します。ジェインは驚いて父親と母親を呼びに行きます。かけつけた父親はジェインに、

毛布が鳥の巢に必要であり、それがあれば生まれくる赤ちゃんが巢の上で暖かく暮らせるのだと教えます。さらに、ためらうジェインに「ジェインだって嬉しくないかい？ あかちゃんのと身につかったものを、ひとに ゆずれるくらい、おおきくなったんだから」

と話し、次のように言いきかせるのです。「ジェインが もうふのことを おもいだすと、もうふは、また、ジェインのものになるんだよ。」

これは、まるで内（面）化を文学的に表現しているように響きます。

アーサー・ミラーには、「セールスマンの死」という彼を代表する有名な戯曲がありますが、この作品も父親と子ども（息子）の世代継承の物語です。子どもがどんなふうに父親を尊敬し期待するか（あるいはその期待が裏切られるか）、父親は自分の生きざまをどんなふうに子どもに見せるかという物語なのです。ア

メリカの父親には、子どもにとってフレンドリーな立場で、よき道標になるべきだという、根強い伝統的な考え方があるようです。ジェインの父親もまたジェインに、他者としての小鳥たちにどう振る舞うべきか、そして成長とはどう振る舞うことなのかを、アメリカの伝統にしたがって教えているのです。

この作品が出版されたころ、ウイニコットは、まだ生きていましたので、この本を読んでコメントしています。彼は、この物語のような終わり方は感傷的な解決法（卒業）であり、子どもの事実にあわないと批判的です（「遊ぶ」と現実）。

ウイニコットは、解決の仕方が現実の子どもの観察に基づくものではなく、大人であるアーサー・ミラーが考えた感傷的な解決法であって、実際の移行対象からの卒業とは違うと言いたいのだと思います。私は卒業の仕方が感傷的であるというよりはむしろ、自発的でないといった方が、より適切ではないかと思いま

す。実際に観察してみるとわかりますが、子どもたちは決して人からさとされ、納得して移行対象から卒業はしません。子どもたちは、自分たちに必要な間ほんなことがあっても移行対象から卒業することはないのです。逆に、必要でなくなると実にあつざりと、あんなにも大事にしていた移行対象を、まるでボロ布のように見捨てて振り返ることもありません。

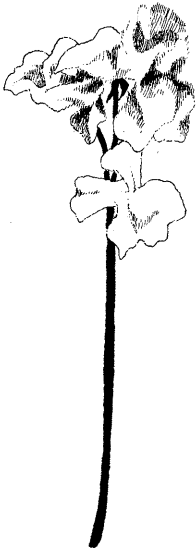
しかし、卒業のさせ方がやや現実からはなれてしまったとはいえ、アーサー・ミラーは子どもの一次的移行対象を驚く程よく観察していると思います。

移行対象と「クマのプーさん」の世界

オランダの作家ブルナーの作品「うさこちゃん」シリーズの中に、クマのぬいぐるみをもらう場面がでてきます。クマのぬいぐるみは欧米において、とても

ポピュラーで、道端でも売っているそうです。これは、私たちに、テディ・ベア、そしてテディ・ベアを原型にしてつくられた、あのクマのプーさんのことを連想させます。これから、クマのプーさんについてみていきますが、クマのプーさんこそ、まさに、ここでずっと取りあげてきた、移行対象のもっとも見事な例です。

クマのプーさんについていく場合、私たちは、プーさんの物語のみでなく、登場人物であるクリストファー・ロビンと、作者でありロビンの父であったミルンのことも考えていく必要があります。クマのプーさんの原型であるテディ・ベアというのは、どんなク



マなんでしょうか。

このクマが、どうしてテデイという名前になったかというところ、エピソードがあります。アメリカ二十六代大統領のルーズベルト（一八五八―一九一九年）の愛称テデイにちなんで、つけられたのです。彼が狩猟中あまりにもかわいいので、子グマの命を助けた、それでテデイのクマ、テデイ・ベアというようになったというのです。

ところで、ミルンの児童詩集である「ぼくらが小さかった頃」にテデイ・ベアがでてきます。この詩集がでたのは一九二四年で、「クマのプーさん」の二年前です。この頃はまだ、クマのプーさんにはなっていない、ただのテデイ・ベア（ぬいぐるみ）です。同じ詩集の中に、「階段の途中で」という詩が、でています。この詩集のあと、第二詩集として、ミルンは一九二七年に「そして、ぼくらは六歳になった」という詩集をだします。ここでは、テデイ・ベアは消え、

プーが登場し、もうほとんど、プーさんと呼んでいいクマを抱っこしています。ここでは、生きたクマとして、ロビンの友人になっています。ぼくたち二人、もう大の仲良しの二人、生きた二人として、つきあっているのです。挿絵に付けられた詩句に「プーという名前がでてきます。「ボクがいるところには、いつもプーがいる」とかいてあります。涙ぐましいくらい親友になっているのです。

ミルンの息子のクリストファー・ロビン、つまり実生活のロビンはどんな子どもだったのでしょうか。ミルンは、自分の息子がテデイ・ベアと遊んでいる様子を見て、「クマのプーさん」の物語を空想していきました。したがって、この問題をぬきにすることはできません。

テデイ・ベアとクリストファー・ロビンが映っている肖像写真を見ると、後ろにいる女の人はロビンの母親だと誰もが思う。しかし、これは、母親ではない。

ナニーといひまして、乳母と看護婦の役目をして、子どもを母親に代つて育てる人です。この頃のイギリスの上流階級の人は、自分で子どもを育てない。(移行対象の提唱者であるウイニコットにも、大切なナニーがいたということです。ウイニコットの父は商人として成功し、市長に二度も選ばれた人ですが)、成功した作家の息子たるロビンもそうでした。割とかわいそうな子です。彼は、このナニーにとでもなつていて、夏、海水浴に出かける時も、ナニーが行かないのなら行きたくないと言っています。彼自身のちに自伝の中で「私は、どこまでもナニーの子で、九歳までそうだった」と書いています。この人は、しかし、彼が九歳の時、結婚してミルン家を去ります。この年彼は寄宿舎に入るので、ロビン自身、ナニーは母のように大事で何でもしてくれる人であった。そして(ここが大切なところですが)、クマのぬいぐるみは、そのナニーの代わりだったといっています。決して母親の

代わりでなかったというところがロビンの二重に悲しいところだと思つたのです。ロビンの母親からの自立はさぞかし大変だったろうと思います。

ところで、クマのプーさんの物語世界の中で展開されるテーマはどんなものでしょうか。

それについては次号で、見てみることにします。

(お茶の水女子大学)

参考文献

井原成男『ぬいぐるみの心理学』日本小児医事出版、一九九

九年

育ちならねてくる時代に育ちる子どもを学ぶ⑥

—小学生を学びの主体とした「保育教育」の試み

Ⅱ「教室での赤ちゃんとの出会い」から—

金田 利子

高山 直子

はじめに

家庭科が小学校に置かれて（一九四七年）以来ずっと五年生（男女共に）からがその対象になってきました。低学年は生活者であつても、生活を対象化するに、この発達年齢がふさわしいからと考えられます。

低学年家庭科は生活の量と質の変化をめざして自主編成カリキュラムにおいて七十年代に二、三の実践が見られました。四十七年当時の指導要領には「家庭建設という生活経験は教科課程のうちに必要欠くべからざるものとして取り上げるべきで、家庭生活の重要性を認識するために」「小学校五、六年において男女共

に」と述べられています。

けれども、保育教育となると、小学校家庭科の学習指導要領において位置づいたことはいまだかつてありませんでした。これは、保育教育が「親になるための教育」としてとらえられてきたからではないかと考えられます。

しかし、この連載のはじめ（七月号）に述べましたように、保育教育の本質を「育てられている時代に育てることを学ぶ」ところにおくならば、この教育は、小学生はもちろん、生まれたときから必要なことと言えます。

そこで、本連載は、これまで指導要領に保育教育のある、中学校と高等学校における実践を取り上げてきましたが、今回から二回は、いまだかつて意識的に実践されたことのない小学校と幼児教育機関における「保育教育」について、それぞれ一回ずつ取り上げることにしました。

小学校以下の子どもが学びの主体となるという保育

学習の意義と意味については、終盤で触れることにし、ここではまず、当保育研究室と静岡大学附属浜松小学校の高山直子氏との共同で行った研究的実践の様子を高山氏に報告していただきます。

小学校での保育教育の試み

小学校の家庭科には「保育」の領域はありません。また、少子化傾向の強い現代において、乳幼児を意識したり、接したりする体験は、本校の子どもたちにはほとんどないといってもよいのです。

今回、大学（生）の研究に協力するということで、本校の六年生の子どもたちが乳幼児とかかわる機会を与えられました。

「育てられている時代に育てることを学ぶのは、自己を知り、自己をつくる教育にもつながる」と言われていますが、それは小学校の教育においても、非常に重要なことだと考えます。子どもたちが乳幼児とかかわることで、子どもたちが自己を見つめ、自分たちの生

活や自分自身、家族に対する意識をどう変化させていくのかを見ることが出来る良い機会として、子どもたちの学びを見ていきたいと考えました。

以下に、「教室に赤ちゃんがやって来る」の実践を通して、子どもたちがどんなふうに学び、意識がどう変化したのかを述べたいと思います。(この実践は、平成十三年九月下旬から十二月上旬の間に、月一回の間隔で赤ちゃんとお母さんが学校にやってきて子どもたちとふれあつたものです。三回の授業が行われ、授業者はいずれも静岡大学の金田先生、事前・事後指導は附属小教諭の高山が担当しました。)

「教室に赤ちゃんがやって来る」の

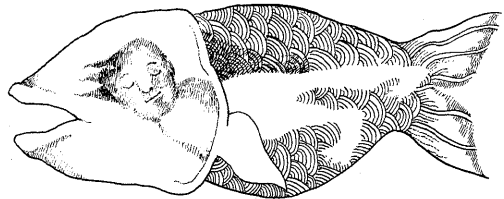
事前実践より

赤ちゃんに対するイメージは？

「来週赤ちゃんがこのクラスにやってきます。」
と言うと子どもたちは、「なぜ?」「何しに?」
と言いつつ戸惑ったようないきような表情を見せま

した。事前の実態調査では、家族に赤ちゃんがいるという子は二名で、多くの子は、赤ちゃんと身近に接した経験がありません。「赤ちゃんと聞くとどんなことを思い浮かべますか」という質問に対して、多くの子が「かわいい」「小さい」と答える中、家庭に赤ちゃんがいる子は「泣くとうるさい」「何でもすぐ壊す」というように、ただかわい
いだけでなく、大変な面もあるという捉えをしていることが分かりました。

また、一人だけ「赤ちゃんは少し気持ち悪い」と感じていた子がいました。この子(M男)がこれから赤ちゃんにどのように接し、どんなことを感じ、考える



ようになるのか注目していきたいと思いました。

赤ちゃんとふれあう子どもたち

一回目の授業

子どもたちは、少し緊張気味で遠巻きに赤ちゃんを囲み、様子を見ていました。赤ちゃんがおもちゃで遊ぶ様子やお母さんにだっこされてあやされている様子などを興味深げに見ていました。また、お母さんからの、家庭での赤ちゃんの様子や育てる上で大変なことなどの話は真剣な表情で聞いていました。しかし、だっこをしてみるように促しても、なかなか自分の方からだっこをしようとする子はいませんでした。

その日の子どもたちの感想には次のようなことが書かれています。

「…さわるとすごくふわふわしてすごくかわいくって、今度十一月に会うときはだっこしてみたいです。」

前述したM男は「久しぶりに赤ちゃんを見ました。

生まれてから五ヶ月とは思えないほど元気に動き回っ

ていました。しかも、お母さんが泣き声や表情だけで赤ちゃんの気持ちが分かるそうなので、僕も表情を見てみましたが、何を考えているのか全く分かりませんでした。そして、つきつきり面倒を見ている親はすごいなあと思いました」という感想を書いています。他の子どものように赤ちゃんをかわいいと思う気持ちは伝わってはきませんが、親のすごさ、たいへんさに着目していることが分かります。

二回目の授業

子どもたちは赤ちゃんに会うのをとても楽しみにしていました。前回と違い、自分の方から赤ちゃんにかわろうとする子が増えてきました。

一ヶ月ぶりに会う赤ちゃんの変化に子どもたちは目を見張りました。

「人見知りをするようになってびっくりした」「髪の毛がたくさんになった」「足を元気に動かして、はいはいをしようとしている」など、多くの変化を見つけました。

三回目の授業

子どもたちは、赤ちゃんと遊びたい、かわいがりたいという思いと共に、どう成長しているのかを見るのが楽しみという思いも沸いてきたようです。

グループで順番に赤ちゃんと遊ぶように促すと、子どもは我先にと赤ちゃんのところへ行っておもちゃであやしたり、声を掛けたりし始めました。赤ちゃんがびっくりするぐらいの勢いです。M男も赤ちゃんのそばで、おもちゃをもつてあやそうとしています。

本時が最後ということで、子どもたちは名残惜しうにいつまでも赤ちゃんとかかわっていました。

実践から見えてきたもの

—小さな赤ちゃんの大きな力—

子どもの感想から次のような意見が出てきました。

「一ヶ月でもいろいろできるようになっていた。短い間にいろんなことを覚えてすごい。」

「赤ちゃんはかわいいという気持ちだけじゃ育てられ



▲三回目の授業の最後に赤ちゃんと遊ぶ子どもたち

ないんだなと思った。」

「赤ちゃんも自分の気持ちをちゃんともっているし、一生懸命いろんなことにチャレンジしているんだな。」

「赤ちゃんの時代があつて今がある。」

「私もこんな風に大切に育てられてきたんだ。」

M男は、自分の気持ちの変化として「赤ちゃんをあまり嫌いではなくなった」と書いています。

赤ちゃんに対するイメージは「汚い」「いたずら」など、まだマイナスのイメージに偏っていますが、実際に赤ちゃんの笑う様子や愛らしい様子、成長していく様子を間近に見ることで、気持ちの変化が起きたのだと思いました。

以上のような表れから、赤ちゃんと実際に継続的に接すること、親からの話を聞くことで、客観的に親子関係を見つめたり、赤ちゃんを人格のある人間として大切に考えたりする気持ちが育まれてきたように思います。自分が親になったときのことをイメージさせるのは小学生にはまだ遠いように感じましたが、赤ちゃん

んと自分を重ね合わせて、自分も大切に育てられてきたんだというように、自分の家族への愛情や絆を再確認する子がいたことは、家庭科の授業で大切にしたい「家族の一員としての自覚」をする上で有効だったことがうかがえます。これは、自己を見つめることができたから、気づいたことであると考えます。小さな赤ちゃんの大きな力を実感させられました。(以上高山)

教室で赤ちゃんとかかわる実践の背景と意図

「赤ちゃんが教室にやってくる」ことをはじめに試みたのはカナダのメアリー・ゴードンさんです。彼女は、子どもたちの心に「共感の根っこ」(Roots of Empathy)を育てることをねらって、一年間に九回(〇歳三月～十一月)ほぼ一ヶ月おきに赤ちゃんが教室にやってくるというプログラムを作りました。それは、それぞれに事前授業と事後授業を入れており、計二十七回で構成されています。

このプログラムは、家庭科としてではなく、共感教

育として、カナダ他の学校教育に導入されています。

しかし、これは一つの完成されたプログラムとして訓練されて資格を得たインストラクターによってのみ行うことのできるものであり、プログラムの詳細についても、インストラクターだけにしか公開されていません。

私たちはこの視点こそ、生活の中で異世代と発展的にかかわる力の基礎を育てる保育教育の狙いそのものではないかというヒントを得ましたが、内容面においては、自分たちなりに家庭科の保育教育としてプログラムを考えて実践してみることになりました。

家庭科の保育教育では、乳幼児との直接体験に意義を見出し、幼稚園・保育園に中・高生が訪問すると言う実践が積み重ねられ、かなりの成果を見ています。

その上に立って、赤ちゃんを教室に迎える実践にはどんな特長があるかを考えその効果を見ることにしました。それには次のような五点があげられます。

① 発達の速度の速い赤ちゃんを継続的に見ること

で発達的な変化を確かめることができる。

② 言葉以前の赤ちゃんなので、相手の思いを想像する力がより多く必要とされ、共感する力の育成が余儀なくされる。

③ 親子一緒に来ていただくので、居ながらにして親子関係を見ることができ、育てる側の立場がわかり、自分の場合と重ねて捉えやすい。

④ 一人の子ども・一組の親子という同じ人をおかわりつつ捉えることにより、同じ対象に対してクラスメートの感じ方かわり方の違いが表われ、互いに学びの変換がより可能になる。

⑤ こちらに来ていただくことにより、学校・教室に異文化が到来することで、教室の風通しがよくなり、居ながらにして異文化交流ができる。

私たちはこうしたことの効果を確かめてみたいと、研究的実践を、附属学校等の協力で行ってみました。

しかも、学生の卒業研究とかねて行うということから、数ヶ月しか使えないということもあり、三回

(三ヶ月)という短期間での実践を試みてみた次第です。また、小学校、中学校、高等学校で実践し、その学びに発達的な特徴と三者のつながりを見出すことを合わせて狙いとしました。

赤ちゃん実践の大きな力 ―その二―

先の授業の様子にみるように、小学生の保育教育に大きな力を発揮した赤ちゃんですが、連れてきてくださった親(ここでは母親)の方にとってはどうだったのでしょうか。この点について少し付け加えていきたいと思います。

協力してくださったのは、家庭科教育を専攻してきており今は小学校の先生で、育休中の方です。

ご自身の気持ちの変化として、「細かい子どもの変化に注目するようになりました。一日一日変わっていく子どもの姿を、今まで以上にうれしく思える毎日です。これだけたくさんの人に大切に思ってもらえるのだから、私も、と思います」と。

また、三回の授業を通して「S子は人見知りの時期でしたが、人見知りもある意味では、人への反応をするということなので、そういうときに多くの人に会う機会が得られたことは貴重なことだと思います。私も子どもたちの前で言った(子どものいたずらには発達してきた証ということなど、そういうときの工夫について体験を話してくださった)からにはその通りにしないと、と思い激しいたずらにも腹を立てずにすんだりできるように思います」。

赤ちゃん実践は、学びの主体としての子どもたちにはもちろんのこと、協力してくださった親の親としての発展にもプラスになっていることがわかりました。そのことは、当の赤ちゃんにとってもよい影響につながっていくことを示唆しています。

金田(静岡大学)

高山(静岡大学教育学部附属浜松小学校)

やぎいません おいじいよ

清宮 聡子

年中児の担任としての生活は予想以上の早さで毎日が過ぎて行った。カレンダーの日付をよく見ると、もう十二月がすぐそこまで来ていた。

落ち葉掃き

十一月も終わろうとしている休日明けの朝は普段よりも少し、外の掃除をするのが大変である。この時季、園庭の葉は紅葉を終えて散り始める。毎朝全ての落ち葉を掃き清めてしまうわけでは無いが、園庭へ出

る出入り口付近は、靴を履き替える場でもあり、きれいに掃いておくのが朝の準備のひとつである。

この日は休日明けということもあり、外には大量の落ち葉があった。その量に圧倒されつつも、お隣の年中児担任のA先生と一緒にいつもの手順で準備を進めた。落ち葉を集め始めてしばらくすると、A先生が「子どもたちと一緒に葉っぱを集めることにしない？」と提案された。その提案を受けて私はすぐに先日、数人の子どもたちが、藤棚の下の落ち葉を懸命に

かき集めていた光景を思い出した。目の前にある落ち葉を少し寄せるだけにして、私は保育室に戻った。

たきび

「おはようございます」いつも朝一番に登園してくるE夫の声が保育室に響いた。私も挨拶を返し、E夫の仕度の様子を見守った。その後で「おはようございます」とひととき大きな声が聞こえた。R夫である。小柄な体から発するその声は、自分の存在を目一杯主張している。R夫の姿を微笑ましく思いながら「おはようございます」と応えた。

次々に登園してくる子どもたちに対応しながらもE夫とR夫が園庭へ向かおうとしているのが目に入った。二人の様子が気になり、後を追った。出入り口のところまで来ると外履きに履き替えようとする二人の姿が見えた。E夫がふと靴を履き替える手を止めた。先程寄せておいた落ち葉に気がついたようである。不

思議そうに見ていたが、後ろに居た私に気がついた。E夫は笑顔で「先生、これどうしたの、たきびするの?」と聞いてきた。E夫の言葉を聞いて、すかさずR夫が「えっ、たきび、するの?」とE夫に尋ねた。

後になってよく考えてみれば、数日前にお山で、たきびごっこ”をしていたE夫やR夫にとって、落ち葉の山をたきびに結びつけることは自然なことである。しかし、一緒に掃除をしようと考えていた私にとって二人の反応は予想外のことであった。その為、一瞬どう答えようか迷ったが、落ち葉の山を嬉しそうに見ているE夫とR夫の姿を目にし、「そうね、たきび”をするのもいいわね」と答えた。それを受けて、二人はテラスに置いてある小さ



な箒を持って来た。そして周囲の落ち葉をまとめ始めた。

“たきび”に加わるT夫とY夫

後から登園して来たT夫とY夫は、かいがいしく箒で落ち葉を集めるE夫とR夫に気がついた。T夫が「何してるの」と二人に声をかけた。「たきびをするんだよ」とE夫が手を止めて答えた。「たきびするの」と少し声を張り上げた感じで、Y夫が会話に入ってきた。「そうだよ」とE夫は答えながらも、箒を持つ手は動き始めていた。

「たきびだって」とY夫は、落ち葉の山を見つめるT夫の顔を覗きこむようにして言った。T夫は一瞬はつとした表情を見せ、そして「ねえ、Y夫くん、僕たちも入れてもらおっか」とY夫に提案した。「うん、そうだね」とY夫は声を弾ませて答えた。「ねえねえ、僕たちも入れて」とT夫は箒を手している二人に声

をかけた。「いいよ。じゃあ、箒持ってきたよ」とE夫が答えた。E夫の言葉を受けて、T夫は主に保育者が使っている箒を持ってきた。一方、Y夫は塵取りを手にし、駆け戻ってきた。

私は少しの間保育室に戻り登園してくる子どもたちと朝の挨拶を交わした。その間も、四人はせっせと落ち葉を集め続けていた。しばらくして見に行くと、落ち葉の山が先ほどよりも高くなり、広がっていた。「さつきよりも大きくなったんじゃない。すごいね」と四人に声をかけた。誇らしげに微笑むE夫とY夫。「おれたちがやったんだよなあ」とほかの三人に、確かめるように言うR夫。「うん、そうだよね」とT夫が言葉が続けた。

満足気になっている四人を前に、私は寄せておいた落ち葉の山が私のイメージとは違ったかたちで活かされたことを、嬉しく思った。同時に、子どもたちが日々の遊びを自身の体験として取り込んでいること、それ

が豊かな発想につながって行くのだと実感した。

おいも作り

「やきいもできるんじゃない」急にT夫が言った。何処かでしたことがあるのだろうかと思いながら聞いていると、Y夫がすかさず「いいね、やろうよ」と応じた。Y夫の積極的な声を頼もしく感じながら、私はさつまいもをどんな素材で作ろうかと考え始めた。「おいもは、どうしようか」と何気なく聞いてみた。「作ればいいよ」と当然という感じでR夫が答えた。「そうね、じゃあ何で作る」と聞き返すと、Y夫が「紙、紙で作ろうよ」と勢い良く答えた。四人のイメージは重なったように、皆で保育室に戻りおいもを、作ることにした。

Y夫に紫色の紙を要求されたので、材料室まで取りに行った。適当な大きさに切った色紙を机に置いたとたん、T夫がそれをグシヤッと丸めた。私はもう少し

立体的な感じを表現して欲しいと思い、広告紙をくしゃくしゃに丸め、それを紫の色紙で包んだ「おいも」を作ってみせた。その様子をいつの間にか見ていたK子が「おいもだ。どうして作ってるの、Kちゃんも作りたい」と言ってきた。K子の言葉に触発されたのか、四人はそれぞれ紙を手にし、作り始めた。

「おいもづくり」はA子やH子、N実といった普段はあまりかかわり合う機会が少ないメンバーが集まり、すすんだ。ある程度の量ができたところで、T夫が持つて行こうとしたのでかごを渡した。自分で作ったおいもを、各自が落ち葉の山の中に、ガサゴソと大事そうに入れた。R夫が「もつと葉っぱを集めなきゃ」と言つて、山に向かつて走り出した。E夫もR夫の後を追つて行った。Y夫とT夫は残つて、火の加減を見るような感じで落ち葉の山を突付いている。側にはA子やK子、N実も居て、楽しそうに自分のおいもの焼き加減をみている。たきび“を囲む子どもたちは突

付く度にガサガサと音を立てる落ち葉の感触を味わいながら、おいもが焼けるのを待っていた。「たきび」の温かさを感じることができる光景がそこにあった。

N 実ちゃんすき

H子が四角いプラスチックのかごを手に保育室から出てきた。「Hちゃんかごを持ってどこに行くの」と尋ねると、「私も葉っぱを集めてくる」と真剣な表情を見せた。「そうなの、Rくんたちはお山に行ったわよ」と伝えると、H子は少し恥ずかしそうに、「先生も一緒に行って」と私の前に立った。最近のH子はこういう申し出が多い。こういう時はなるべくきちんと応えようと思う。「いいわよ、一緒に行きましょう」と返すと、H子は「やった」と小さく跳ねた。

H子と小山に行くと、先ほど勢いよく駆けていったR夫とE夫が落ち葉集めではなく、追いかけてっこをしていた。声をかけようとしたが、その間もなく、二人

は階段の方へと向かって行った。

「どうしたのかな。E夫くんた

ち」と私と同じ思

いをH子が口にした。「どうしたのかなあ」と私も不思議な思いで答えた。二人のことを気にしながらも、落ち葉を前にはしゃぐH子と一緒に、かごいっぱい茶色い葉を集めた。

かごから葉っぱが落ちないように慎重に運ぶH子とともに、たきびのところに帰って来たそこにはN実しか居なかった。ほかのひとたちはどこへ行ったのかかと思ひ、保育室の中をみると、T夫を始め数人が新たに「おいも」を作っていた。

N実がH子に「葉っぱを取ってきたの」と尋ねている。「そうそう」と言いながら集めた葉を手で振り掛けるようにたきびの上に落としていた。H子のかごを



空にすると、私にまた一緒に来て欲しいと言った。その様子を見ていたN実は「H子ちゃん、N実が行ってあげようか」とH子に話しかけた。H子は意外な申し出に「えっ」と小さく言った。あまり、かかわる機会が無かったN実に言われて構えてしまったのか、H子は言葉が返せなくなってしまった。けれどもN実は、H子の様子に引くことなく、「かご貸して。N実が行く」と言ってH子の持つていたかごに手をかけた。

H子はN実の勢いに押され気味な表情をみせたが、「ありがとう」と少しぎこちなく答えた。N実はその言葉を聞いて嬉しそうにかごを受け取り、お山に向かってスキップしながら行ってしまった。残されたH子は私に照れくさそうに「N実ちゃんすき、優しいんだもん」と言った。その表情にはN実の申し出を嬉しく思う気持ちが表れていた。

一緒に行くというかわりではなく、「代わりに行く」と言った点が二人の関係を表していると思った。

N実がしたことは、H子のなかに「優しさ」となって伝わり、「すき」という気持ちを生んだのであった。短いかわりであったが、ひとつの活動が二人の距離を縮めたことが大きいと感じた。

やきいもやさん

結局、焼きいもを作る遊びは片付けの少し前に、T夫とY夫を中心に「やきいもやさん」に変わっていった。小さな机が運び出され、その上にトレーが乗せられ、焼きあがったおいもがそこに並べられた。面白いことに、机の位置が徐々に変えられ、最後は机の下でたきびをし、やきいもを作るようになっていた。枯れ葉の山はそのまま残すことにして、その日の活動を終えた。

次の日も朝からT夫とY夫が中心になり、「やきいもやさん」が始まった。「お店やさん」というイメージが強いせいも、前日はまた違った動きがそれぞれ

に見られた。T夫は「お店のポスターをつくる」と言つて私に文字の部分を書いて欲しいと頼みに来た。

T夫のほか数名が一枚の画用紙を囲み、ポスターが出るまでを見守つた。私がT夫に言われたとおり「やきいもやさん おいしいよ」と書き終えるとK夫がおいも食べている人の絵を素朴な感じのタッチで描き加えてくれた。

Y夫はひたすらおいもを作り続けている。そして、できたものを運び、机に並べた。通りがかつた年少組の人が二人お店に気づき、買つてくれた。しかし、手に何本も持つのは難しい様子が見てとれた。Y夫に「袋がいるかしら」と問いかけてみた。Y夫は「そうだね、作ろうよ」と言葉を返してきた。お店のことが気にかかるY夫を残し、袋を作る為の材料を取りに、保育室に戻つた。ざら紙のような質感の茶色い紙がちようどあつたので、それをお店に持ち帰つた。Y夫やK夫、F夫たちと共に、紙を半分に分けて両端を

テープで止めただけの簡単な袋を作つた。それにおいもを入れると、本物の石焼いもやさんが包んでくれるような感じになつた。

やきいもやさんの旗

ろう下にポスターを貼り終えて戻つてきたT夫の手には「やきいもやさん」と書かれた、旗が握られていた。いつの間に作つたのだろう。どこから見つけてきたのか、丁度良い長さの木の枝に紙を付けた旗だつた。それを持つて皆にお店のことを伝えるという、T夫が考へた宣伝方法だつた。「素敵な旗が出来たわね」と声をかけたが、T夫はそれに答える間も無く園庭の中央に向かつて走り出した。F夫がかごに包みを入れて持ち、T夫の後を追いかけた。残された人たちは、私も含め少々あつげにとられていた。Y夫とK夫は顔を見合わせて微笑んだ。きっと先ほどの光景を思つて笑い合つたのだろう。

保育室からA子が出てきた。「先生、T夫くんみたいな棒が欲しいの」と訴えてきたので一緒に適当な棒を探した。T夫のよりも長さのある棒をお部屋にあった材料の中から探しあてた。その棒の先に「やきいもやさん おいしいよ」という文字とさつま芋が五本描かれた二十センチメートル四方の厚紙を付けて、旗にした。A子は「できた」と嬉しそうに声を上げた。そしてすぐに、「私も行ってくる」と言って園庭に向かった。桜の木の近くまで走って行ったA子の姿はあつという間にお山のほうへ消えて行った。

それから

「やきいもやさん」の遊びは数日、場を外から室内へと移して続けられた。メンバーも入れ替わった。やきいもを買うとくじ引きができるといったアイデアも生まれたりした。寄せておいた落ち葉の山が子どもたちにもたらしたイメージ。そこから始まったこの遊び

を通して、子どもたちの新たな一面や、生き生きとした表情を多くみたとように思う。

四人の男の子たちが落ち葉を集める姿や、H子とN実のかかわり、Y夫とA子の走る姿を思い起こすと、私は温かい気持ちになる。「たきび」と「やきいも」の温かなイメージがそこに重なるのかもしれない。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

編集後記

今月の特集は「動く・動かす」です。四人の方に書いていただきました。私たちの暮らしの中にある「動く・動かす」ということについて改めて考えてみたいと思います。

新しい連載も始まります。徳野雅仁先生には「生きものの共存の畝間から」と題して一年間書いていただきます。毎月の菜園での、野菜づくりとその周りに見られる昆虫や雑草などの観察から、「自然界の素晴らしさやおもしろさを子どもと一緒に分かち合えれば」とうれしいです。

*

徳野先生がソラマメについて書かれているのを読んで、わが家の

庭先でサヤエンドウを育てたことが思い出されました。

ある秋、春を待つ楽しみにと種を蒔きました。それが、春先になるとぐんぐん背丈を伸ばし始めました。

あわてて二畝にして支柱を棚のようにしたのですが、それでも毎日のように縦横に継ぎ足すほどのたくましさでした。やがて花が咲き始めるとそれが道行く人の目にとまり、多くの方に声をかけられました。経験のある方からおほめの言葉やアドバイスをいただき驚くやらうれしいやらでその春は始まりました。

それからは、子どもたちとマメをいでは、その日の収穫を（小さな手にいっぱいほはずつですが）あちこちにおすそわけしました。子どもたちと共に自然の恵みを実感できたうれしいできごとでした。（A）

幼児の教育

第一〇一巻 第五号

（二〇〇二年五月号）

定価五五〇円（本体五二四円）

発行 平成十四年五月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二二-一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五二-一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一-四一九

〒〇三-五三九五-一六六一三（営業）

〒〇三-五三九五-一六六〇四（編集）

振替 〇〇一九〇-一-一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所「フレーベル館」にお願いします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

人気シリーズ 第5弾!!

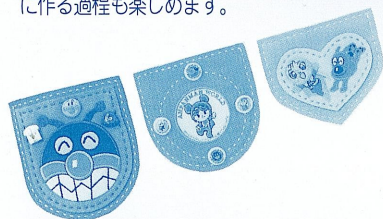
好評発売中

手づくり アンパンマンがいっぱい 5

通園グッズ

- *保育者やお母さん方の感性を活かして、楽しんでつくれ、子どもにも喜ばれるものばかりです。
- *原寸型紙（一部拡大必要あり）付で、作り方もイラストで紹介。見ているだけでも楽しく、つくれたらもっと楽しいものです。
- *作品をカラーで紹介、見やすく読みやすい画面構成です。

*アンパンマンの楽しいキャラクターが、通園バッグやシューズ袋、お弁当袋、おひるねグッズ、手投げバッグ、帽子などなどについてきて、いっしょに登園。アンパンマンの元気パワーで、毎日の通園が一層楽しくなります。
*既成の素材をうまく活用して、簡単に手づくりできるものばかりですので、子どもと一緒に作る過程も楽しめます。



☆島田明美（しまだあけみ）

神奈川県生まれ。東京デザイナー学院卒。ペーパークラフトなど造形活動中心のフリーイラストレーター。テレビ出演も多く、NHK「ひとりできるもん」BS日テレ「それいけ! アンパンマンくらぶ」などの工作コーナーに出演しています。

島田明美 / 著

A B判 96頁 定価：本体2,000円+税

キンダーブックの
フレール館

「平成11年改訂 保育所保育指針」にそって新しくなりました。

改訂新版 保育の計画・作成と展開



著者
今井 和子 東京成徳短期大学教授
鶴田 一女 越谷保育専門学校専任講師
増田まゆみ 小田原女子短期大学教授

- *新しい保育所保育指針の考え方をふまえた保育の計画とその実際例を示しています。
- *計画の考え方、立案の手順などを丁寧に解説し、それぞれの園の実情にあった計画が立案できるように配慮されています。
- *立案された計画と、実際の活動(計画の展開例)を示し、計画の見直し、修正、そして実践と、計画と実践の関係が具体的にわかるようになっています。
- *産休明けから5歳児まで、年齢別に年間計画例、月指導計画例、日案例が掲載されています。
- *今回の改訂で強調されている、家庭との連携にポイントをおいた計画例を掲載しています。
- *長時間保育、夜間保育など、子どもを取り巻く環境の変化による新しい保育課題に応じたさまざまな計画例を掲載しています。

B5判 208頁 定価：本体2,000円+税

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。